

娯楽マンガ作品を教材に(5) 藤本タツキ『ルックバック』

Using entertainment manga works as teaching materials:

“Look Back” drawn by FUJIMOTO Tatsuki

茶谷 薫 CHATANI Kaoru

はじめに

筆者が以前から報告してきたように、「学習マンガ」と一般の「娯楽マンガ」には大きな違いがある。「娯楽」を主眼においたマンガ作品は人々を惹きつけるため、それらを学習に役立てられれば、大きな効果が期待できる<1,2,3,4>。人気作品や人気作家のマンガ作品を教材にできれば、学生や生徒・児童のみならず、社会人を対象とする生涯学習の場での効果も高いだろう。現代の娯楽マンガは、かつての小説のように、アニメーションや実写映画などの様々なコンテンツの原作になることもあれば、ゲームや小説をマンガ作品になることもある。つまり、娯楽産業の基層部分ともなっている。それ故、人気作品は幅広い世代の人々に知られ、教材としての価値も高い。

そこで、筆者は娯楽マンガの具体的な教材化を、授業でも例示などを通じて実践している。本稿では、藤本タツキの『ルックバック』から教材の例として使用可能な点を列挙する。これは比較的新しいマンガであり、新しい試みもされた作品である。一方で、筆者が読み取れなかったオマージュや、筆者が持ちえない視点からの意見が多数出されている。これらの他者が論じたものも参照し、まとめる。

藤本タツキと『ルックバック』

藤本タツキ

本項では藤本タツキについて概説する。情報の典拠は秋田市立文化創造館のWEBサイトに、『幼少期の思い出』の1つの記事として掲載されている、藤本タツキの『故郷から学んだこと』のプロフィール欄<5>および藤本と沙村広明との対談記事<6>、『このマンガがすごいWEB』の記事<7>である。

藤本は1992年に秋田県で生まれた。プロフィールとして掲載されている出身地の「にかほ市」は、2005年10月1日に仁賀保町（にかほまち）、金浦町（このうらまち）、象潟町（きさかたまち）が合併して誕生した。日本海に面し、山形県との県境になっている、秋田県南西端の自治体である。

藤本は秋田県立仁賀保高等学校に在学中から、WEB媒体（ウェブコミック投稿サイト

「新都社」)で活動していたという。美術大学に進学するための画塾や予備校が近隣になく、高齢者も通う一般的な絵画教室で油絵を学んだ。その後、山形県にある東北芸術工科大学美術科洋画コースにAO入試で入学した。入学後は、油絵ではマンガの絵の上達を望めないと感じ、図書館でクロッキーを描き、独学していたという。

集英社の、『ジャンプSQ』に作品を投稿するとともに、ネームを多いときは毎日1本、担当編集者に送っていた。2013年、読切マンガ作品の『恋は盲目』で第9回クラウン新人漫画賞佳作を受賞し、これが2014年の『ジャンプSQ.19』Vol.13に掲載された。その後、同じ『ジャンプSQ』に『ファイアパンチ』の連載を試みたが、結果は不可だったという。そこで担当編集者の林士平が、同じ集英社の『少年ジャンプ+』に連載企画を提案し、漸く連載が決定した。この準備のため、藤本は上京することとなった。2016年4月から『ファイアパンチ』の連載が始まったところ、SNS等で大きな反響を呼び、『少年ジャンプ+』の読者獲得に貢献した。同作は2018年に連載が終わり、全8巻の単行本となった。次に同じ集英社の『週刊少年ジャンプ』で、2019年1号から『チェンソーマン』を連載した。2020年12月発売の2021年2号で第1部の連載が終了した。この段階で単行本は11巻まで発行された。『チェンソーマン』は舞台化、アニメ化もされ、『少年ジャンプ+』で第2部が連載中である。

藤本は、『チェンソーマン』で2020年に第66回小学館漫画賞少年向け部門、2021年と2022年、2023年3年連続でハーベイ賞BestManga部門を受賞した。『チェンソーマン』は、『このマンガがすごい! 2021』(宝島社)でも「オトコ編1位」になった。さらに同誌の『2022』で『ルックバック』が「オトコ編1位」になった。

『ルックバック』について

『ルックバック』は、集英社の『少年ジャンプ+』で2021年7月19日に公開された、長編の読み切りマンガ作品である。公開日は、2019年7月18日に起きた京都アニメーション放火事件の2年後の翌日であった。

『少年ジャンプ+』は、オンライン上で読めるウェブマンガ作品の配信を行っており、専用アプリのほか、WEBブラウザでも作品が読める。『ルックバック』は143頁もの長編であるが、連載ではなく読み切りで、しかも期間限定で、無料で閲覧もできた。一部、精神病患者に対する偏見を助長するという批判があり、当該部分を修正後、同年9月付で単行本が発行された<8>。2024年6月に劇場アニメ映画が公開された。

『ルックバック』のあらすじ

『ルックバック』の主要な登場人物は同学年の藤野と京本的女子2名のみである。藤野が京本をライバル視し始めた小学校4年生の時から、青年期までが丁寧に描かれている。

藤野は小学校の新聞で4コママンガを連載し、周囲からマンガの才を褒められていた。

ところが、不登校児の京本が素晴らしい画力で描いたマンガが、藤野作品の隣に登場し、状況は大きく変わった。周囲の賞賛は京本に集まり、藤野の天狗の鼻は折られる。藤野は画力を向上させるためにデッサンなどの本を買い、同世代とも遊ばず、家族との交流の時間もあまり取らず、熱心に取り組んだ。しかし、努力しても京本に追いつけず、6年生の途中で連載を止めた。マンガ制作に熱中する藤野を心配した姉に勧められた空手を始め、姉同様に心配していた友人女子の仲間とも遊ぶようになった。

小学校の卒業式の日、教師に頼まれて京本の卒業証書を届けに行った藤野は、京本から熱烈なファンだと聞かされる。「負けた」と思っていた相手に認められた藤野は有頂天となり、再びマンガを描くようになった。藤野のマンガ制作に京本も背景の作画として加わるようになった。2人は「藤野キョウ」というペンネームでコンビを結成し、マンガ賞受賞を目指す。13歳の時、東京の出版社に持ち込み、ある雑誌で準入選を受賞し、読み切りが掲載されるまでになった。この賞で得た賞金を使い藤野は、マンガ以外のことではほとんど外出しなかった京本を街に誘い出す。普段とは異なる服装で電車に乗り、街で映画を鑑賞し、書店を覗き、クレープやハンバーガーなどを食べ歩いたのだ。それは不登校で引きこもりだった京本が家の外に出て良かったと思える時間だった。

「藤野キョウ」コンビが海や水族館、東京などで取材をした上で描いた描いた読み切り作品が、7本も掲載された高校卒業間近の時、編集者から連載を持ちかけられる。藤野は非常に乗り気だったが、背景美術の世界に惹かれていた京本は美大に行くため藤野のマンガを手伝えない、と伝える。藤野は京本を引き留めるが、画力向上のため美大に進学したいという京本の強い決意は揺るがず、コンビは解消となった。

京本は山形にある美術大学へ進学、藤野は「藤野キョウ」のペンネームのまま連載を続け、アニメ化されるほどのヒット作、『シャークキック』が出るようになった。藤野がマンガ制作を続けていたある日、山形の美大で不審者が学生を無差別に殺害する事件が起きる。学内で絵を描いていた京本はその犠牲者の一人だった。ショックを受けた藤野はマンガを描けず、『シャークキック』は休載となった。

京本の葬儀（もしくは通夜）の晩、藤野は自身が京本を家の外の世界に誘い出したことが、今回の悲劇の原因ではないかと後悔する。そして小学校の卒業証書を届けに行った日に京本とは話さなかった、もう一つの世界が立ち現れる。その世界では引きこもったままの京本は、やはり美大に進学し、不審者に襲われる。しかし、小学校の時にマンガを諦めたままの（つまり、マンガ家になっていなかった）藤野が、習い続けていた空手を活かし、京本を救うのだった。そこで初めて二人が、小学校の卒業証書を渡した時のように、藤野のマンガについて会話する。

現実に戻った藤野は、亡き京本の部屋に藤野の連載漫画の単行本や、丹前（どてら）の背に記した自身のサインを目にする。丹前のサインは、藤野が卒業証書を届けに行った際に、京本に頼まれて書いたものだ。京本と二人でマンガを描いた日々、マンガ制作の苦し

さを語ったことを思い浮かべた藤野は再び、マンガを描き続ける道を選ぶ。

『ルックバック』の教材利用

『ルックバック』は本稿執筆時の2025年6月現在も、筆者の勤務先大学の学生にも良く知られている作品であり、作者の藤本タツキも非常に人気がある。このような作品や作者のことを教材にすることは、効果が大きいと推量される。特にマンガ家を目指す学生が多い筆者の勤務先大学では特に重要な作品だろう。以下、幾つかの項目に分けて説明する。

オマージュ

小林白菜は、『ルックバック』というタイトルに「振り返る、追憶する、背中を見る」などの意味があるだけではない、と指摘した。『ルックバック』の「本文」（表紙ではない頁）の最初のコマは、小学校教諭のバックが教室の黒板となっている。その黒板の右端に「Don't」と記されている。また、作品の最終頁の左下端に「In Anger」と記された本が描かれている。「Don't」と「In Anger」、そしてタイトルの『ルックバック』を合わせると、英国出身のロックバンドのOasisの『Don't Look Back In Anger』とになり、それは藤本が意図したことだろうと小林は述べた<9>。この歌詞に出てくる言葉や、曲の意味が分かると、藤本の『ルックバック』のさまざまな場面が同曲のオマージュである推測できる、と解説している人もいる<10>。

また、小林白菜は『ルックバック』最終頁にクエンティン・タランティーノ（Quentin Jerome Tarantino）監督の映画『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド（原題：Once Upon a Time in... Hollywood）』のBlu-rayのパッケージらしきものがあると指摘した。2019年のこの映画で、監督のタランティーノは自らが愛した昔のハリウッドを描き、殺された俳優が殺されない世界を提示した。マンガ家である、きたがわ翔と山田玲司は対談の中で、これらのことも解説しながら、藤本は映画作品そのものにも惹かれただけではなく、マンガを描く原点に立ち返る意味もあったのかもしれない、と述べた<11>。

きたがわは山田との対談で、くらもちふさこの『おばけたんご』というマンガのモチーフとの類似を指摘した<11>。くらもちふさこは1972年代にデビューした日本の少女マンガ家である。くらもちの代表作は『いつもポケットにショパン』、『天然コケッコー』、『花に染む』などである。くらもちは少女マンガの大きなテーマになった、日常生活を営む少女の心理を繊細に描いた作家のひとりとして知られる。

同じくきたがわと山田は、藤野と京本が映画の『アマデウス』のモーツァルトとサリエリ、藤子不二雄^④が、藤子・F・不二雄と組んでいたコンビ（藤子不二雄）の軌跡を自伝的に描いた『まんが道』の才野茂と満賀道雄のように、天真爛漫で天衣無縫な天才と、天才に憧れ嫉妬するものの社会性のある主人公というキャラクター構成が、『ルックバック』でも踏襲されているとも述べた。

藤本は京都アニメーション制作のアニメ作品のファンでもあり、『ルックバック』で無差別殺人のシーンを描いたのは、京都アニメーション放火事件のこともモデルにし、前節で記したように配信日が事件発生の2年と1日後であることにも意味があるという<例え
ば11>。主要登場人物の藤野の「藤」と京本の「本」は作者である藤本の苗字に由来する
だろう<11>。それだけではなく、京本の「京」は「京アニ」と略された京都アニメーションへの追悼かもしれない。

作中で京本が襲われる事件が起こったのは2016年1月10日となっている。この日はデヴィッド・ボウイが癌で死去したものと同年同月同日である<12>。デヴィッド・ボウイは「Look back in anger」という曲を歌い、PVで絵を描いたという<13>。つまり、『ルックバック』はデヴィッド・ボウイを追悼する作品としても意識されていたのかもしれない。

また、藤野のアニメ化される『シャークキック』は、藤本自身の人気連載作品『ファイアパンチ』を連想させる。それは「キック」と「パンチ」の対比があるからだ。ちなみに11巻まで出ている描写は、藤本の『チェンソーマン』第一部と同じ巻数であり、ここにも意味があるのかもしれない。

マンガ家の見解

前項でも見解を引いた、きたがわ翔と山田玲司はマンガ家としてキャリアが長く、マンガの作品や作家についての評論もしている。二人が『ルックバック』のマンガ作品としての新しさをYoutube動画で語ったこと<11>のうち、マンガ家ならではのと思われる見解を下にまとめる。これらは筆者の勤務校に在籍したり卒業したりした、マンガ家を目指している人々や、マンガ家自身にも役立つ。それだけではなく、彼らにとり、筆者よりも遥かに強く印象的に捉えられる内容ではなかろうか。

まず、印刷を前提とせず、無料でWEB公開する長編の読み切りだからこそ可能になったコマ運びがあるという。具体的には細切れの連載であればカットされるような、余裕のあるコマが多いとのことだ。例えば、机に向かってマンガを描く背中を描写したコマである。このようなことは、通常の連載ではあり得ないそう。一般的に商業誌連載では、生活のため、お金を稼ぐため、長期連載を目指し、読者を渴望状態にさせる「引き」を意識して描かざるを得ない。このことに厭きているマンガ家は多いと山田は指摘した。

コマ運びとは別に、『ルックバック』に描かれた一つが、マンガ家の孤独ではないかという。そもそもマンガを作る作業は孤独であり、アシスタントともオンラインでのやり取りになる制作作業は、昔の「対面」、「リアル」でアシスタントが来ていた時代よりも一層孤独だという。また、アイドルなどとは異なり、マンガ家はファンとも対面で会うことはほぼ無い。そのため、この点でもマンガ家は孤独な仕事であるとのことだ。これについては、筆者の勤務校の卒業生で、マンガ家でもあるK氏の話も連想された。コロナ禍で行動制限が続いていた2022年の前期、筆者の担当授業でゲストスピーカーとして話した次の内

容である。K氏はマンガの背景描写の修行するために某マンガ家のアシスタントをしていた。ある連載マンガ作品が全て仕上がった後、オンライン会議のZoomで、初めて某マンガ家の顔を見、声を聞いたという。背景をオンラインで「納品」するだけで、指示は文章で書いてあったため、直接言葉を交わすことが、連載終了のオンライン慰労会の場合だけだったという。

少女マンガも得意としてきた、きたがわに拠れば、藤本の絵はクールだが、『ルックバック』では、例えば京本が喜ぶときのような、柔らかい表情を上手く描いているようだ。美術大学の油絵を専攻した山田が解説するには、藤本の人体の描き方も美大でデッサンを学んだ人であり、それが良い「味」を出しているという。

藤本は『チェンソーマン』よりも前に、『妹の姉』という短編作品は姉妹の絵を巡るライバル関係を描いた。これが『ルックバック』の元になった作品であり、テーマは『ルックバック』同じ、近くにいる人、自分がコンプレックスを感じている人は、自分を見ており、互いを尊重しあえる、というものだろうと山田は述べた。きたがわは、それは少年マンガというよりも少女マンガに近いだろう、と指摘した。性愛を描かなくても良い純粋な関係として姉妹や、藤野と京本という同級生女子同士を主要キャラクターにしているという。また、この『妹の姉』に関連し、藤本の若い頃の短編は一般人の良いと感じるような展開ではなく、「乱暴」な展開になっており、それが非常に質の高いものとなっているという。

きたがわと山田は、『ルックバック』は「何のためにマンガを描くのか」というマンガ家としての原点に立ち返った作品でもあると述べた。『ルックバック』は『チェンソーマン』の連載中から構想されていたことから、藤本は人気を維持する義務に縛られ、何のためにマンガを描いているのかを整理する必要があったのではないかと、いうのだ。

以上の山田ときたがわの発言を聞くと、『ルックバック』の無差別殺人犯が振りかざす工具は、「チェンソー」ではないが、連載マンガに対するある意味、破壊衝動のようなものだと感じられる。

マンガの魅力

『ルックバック』の京本は部屋からほとんど出ない不登校児として登場する。藤野のマンガが唯一に近い外界との通路になっている。京本は、藤野が卒業証書を届けに来た時に、ドアの下に空いた隙間から部屋に滑り込んだマンガを見て、部屋から出、玄関の外まで藤野を追いかける。その後、京本は藤野の家や、書店、普段とは異なる服装で電車に乗り都市部に連れていかれるなど世界を広げ、背景美術の素晴らしさを知り、美大にまで進学する。

藤野は不登校ではなく、友達もおり、運動神経も良く、コミュニケーション力もある。上述したように、周囲からマンガを褒められ、内心は得意であった。しかし、京本の画力

に打ちのめされ、練習を重ねる。それでも画力は京本ほどには伸びず、筆を折るのだが、京本にファンだと告げられ、「承認」<11>されたことでマンガを再び描くようになる。「リア充」の藤野も、引きこもりの「コミュ障」とされる京本による承認で、好きなマンガ制作に打ち込めるようになるのだ。

ドアの隙間から滑り込むマンガという描写は、上述のように小学校の卒業式の後では京本を外に連れ出し、藤野と会話させる契機となった。大人になった後も、京本の死後に藤野が「もう一つの世界」を思うシーンや、藤野が京本の死が現実である世界に戻り改めてマンガ制作を再開するシーンの「繋ぎ目」ともなっている。部屋に入ってくるマンガによって、京本は世界を広げ、藤野はマンガを諦めた自分が京本を救う世界を想起し、また現実に戻るのだ。ちなみに、小学生の藤野が一旦筆を折った際に、練習を重ねたスケッチブックを廃棄するよう母親に頼むシーンでも、マンガを描いた紙が、そこから滑り落ちる。それは、藤野がマンガを完全に捨てきれなかった心を象徴しているのかもしれない。

つまり、マンガがその人の人生の重要な何かである、ということを藤本は表現している。マンガが子どもの世界を広げ、『バクマン』や『まんが道』<14>のように「友情」を育み、人を成長させる。マンガがなければ生き甲斐がない、マンガを描くことが作家本人の苦しみも喜びにもなり、他者を喜ばせる。『ルックバック』はこのようなことを感じさせる物語である。2025年本稿執筆現在、マンガやアニメ、ゲームが救いとなっている不登校の子どもや不登校気味の子どもは増加している<15>。その人たちにも希望と救いをもたらす描き方だろう。

コミュニケーションツールとしてのマンガ

スポーツとは対照的に、マンガなど魂が惹かれるものに没頭する姿がオタク扱いされるのは、他者とのコミュニケーションを拒否しているように見えるからだろうか。

藤野はマンガばかり描いていることを家族や同級生から心配される。中学校に進学したら、オタク扱いされ、気持ち悪がられる、と忠告する同級生までいる。藤野は京本に敵わない、とマンガを諦めた後、家族や友人と交流し、前項で述べたように、練習したスケッチブックの山を捨てるよう、母に頼む。一方、京本は藤野のマンガのファンとなり、スケッチブックの山が多数できるほど描き続けていた。廊下に溢れ出たスケッチブックの山々を目の当たりにした藤野は、京本の努力は自身の練習量を遥かに超えていることを察知したはずだ。もうマンガを描かないと筆を折った藤野は、この時、引きこもっている京本を登場させるマンガを描いてしまう。これが京本を外に連れ出す契機となった。

これらのエピソードは、藤野と京本は直接話しているわけではないが、制作したもの、制作する過程を示すもの、つまりマンガ作品を通じて、コミュニケーションしていることを示している。もちろん、藤野と京本の共同作業はコミュニケーションであり、所謂「オタク」と揶揄されるべきものではないという描き方だ。

『ルックバック』は、きたがわや山田が指摘したように、マンガを描くことの意味を藤本自身が振り返って（＝Look back）確認する、ということが本来の意味だろう。また、「バック」には、作中、何度も描かれているマンガ執筆中の背中（back）の含意もあるだろうか。さらに真摯に取り組むマンガ家の背中を感じてほしい、という願いもあるのかもしれない。京本が藤野に初めて会った際に、丹前の背にサインしてもらうこと、その丹前のサインを見た藤野が、再びマンガを執筆するように立ち上がり、東京のマンガ制作場所に向かい、デスクに向かって執筆を続ける姿が、全て背中を見せるコマとなっている。また、小学生の藤野が京本に刺激され、一生懸命に画力向上に取り組むようになってから、初めてデスクに向かう背中のシーンが、季節が変わっても次々と並ぶように描かれている。没頭する姿は、オタクとして差別されるべきではなく、仏像や修行者のように崇高さを感じさせる。このように、制作に没頭することの素晴らしさを感じさせる本作は、芸術を始めとする何かに打ち込む学生にとり、重要な「お手本」や「振り返り」となるだろう。つまり、マンガは藤野と京本のコミュニケーションツールになっているだけではなく、作者から読者へのメッセージ発信ともなっている。

風景描写

『ルックバック』は藤野と京本の部屋でデスクに向かって執筆するシーン、小学校や中学校のシーンなど、室内での場面が多い。ただし、室内描写の間に学校の校舎を外から映すシーンが挟まれたり、室内から外が見えたりするシーンもある。後者の例は、藤野のデスクの前にある窓から見える隣家と、山である。外の明るさで、昼間も夜間も藤野がデスクに向かっていることが伝わる。時間帯だけではなく、隣家の屋根に雪が積もったシーンもあり、季節の移ろいも感じさせる（部屋の中のカレンダーの数値でも、当該コマの月が分かるが）。連載マンガ家として藤野が上京した後も、執筆するデスクの前に大きな窓が広がり、そこには故郷と異なる大きなビルが聳めいている。京本の大学もテレビ画面の中のニュース映像と、藤野の中で浮かんだ京本が生き続ける場面で巧みに描写されている。

屋外の描写も重要である。持ち込みをする出版社の外観、編集者と話すカフェ、東京タワー、水族館、藤野が本やスケッチブックを買う書店、住宅街にある京本の家玄関先、藤野と京本が遊ぶ街中のシーンなどでは、藤野達がマンガ家として成長していく様子が風景で知らされる。物語の最後に、藤野が京本の家を後にし、田舎道を歩き、都市部にある仕事部屋に戻ったシーンは、場所の変化のみならず、藤野のマンガに向き合う気持ちも連動しているだろう。

藤野と京本の育っている場所は藤本タツキの故郷がモデルとなっており、田圃がたくさんある。例えば、藤野の登下校シーンは都市部ではなく田園風景である。京本のマンガが初めて学年新聞に掲載された後、その画力に打ちのめされた藤野は田圃の間にある未舗装の道を歩いている。そこでは、遠くで田植え機を操る人がいる。藤野と京本がコンビニエ

ンスストアに、初受賞記事が載った雑誌を買いに行くシーンは、東北地方の日本海側の雪の深さを感じさせる。京本の死に衝撃を受けている藤野は、連載する夢について京本に語る場面を思い浮かべるが、それも雪の中であり、初受賞時の高揚感を連想させる。海やセミをスケッチするシーン等は読み切りマンガに活かされていることも示されている。コンビを解消することになる、山を背景に住宅と田畑があるシーンは、美大進学と上京で故郷を離れることとの対比的な効果がある。このような音やにおいまでが感じさせられるような風景が描けるのも、藤本がその場に長くいたことがあるからだと思わされる。

「自然」

藤本は、故郷の「自然」な田圃や山の風景については、秋田市立文化創造館の『故郷から学んだこと』<5>に興味深い見解を寄せた。その故郷は「田んぼが地平線の奥まで」あり、アリが屋内を歩くほどの「ド田舎」で、「自然と非自然との境目が曖昧な」生活を送ってきた。自動販売機に光に惹かれ付着した甲虫類を捕まえに行った藤本にとり、その自販機は「山に生えている木々と同じ」であったという。成長後、自然だと思っていた木々は、ほとんどが植林であり、田圃の水路も市が造り、山も管理者が整備していると知った。「自然と認識していたものはすべて人の手が増えられた非自然」で、自然・非自然の境界の曖昧さが分かり、「曖昧な境界を持っていた方がいい」と故郷から学んだというのだ。

幼少期から「馴染んだものが自然」、「それより後の物は全て不自然、非自然と認識していく」ため、例えば、馴染みのない「新しいジャンルの音楽にハマれないのもそれが不自然だからだ」と藤本は述べた。「曖昧な境界」であれば、「常に新しい事を面白がれる」ため、それが良いのだ、という。

人がある程度、手を入れた「自然」のようなものは、一種の「里山」と例えても良い。『ルックバック』とは対照的な肉体的戦闘が多数描写された『チェンソーマン』では、悪魔を身に宿した主人公、救った猫に癒されたことで人間のような心を持つに至った魔人などが活躍する。人と悪魔の間にあるダークヒーローを主人公にした作品を産んだ背景には、「曖昧な境界」で体験した捕虫や、都市部とは異なる景観などの体験が基礎となっているのかもしれない。

マンガ家でもあるT氏は「作品は、結局のところ、その人の体験からしかできない」と話した。筆者の本務校の大学にはマンガや小説、映画をはじめとするストーリー性の高い作品の作り手になりたい学生が大勢いる。藤本の育った里山のような空間は、北名古屋市にある本務校近辺でも次々と失われているが、名古屋市の都心部よりは様々なものが残されている。学生にはキャンパス周辺の環境にも親しんで欲しい。その「誘い水」としても『ルックバック』は非常に良いテキストとなるに違いない。

まとめと今後の課題

上に記したように『ルックバック』は、マンガ家はもちろん、何かに没頭することの素晴らしさを伝えている点で、芸術大学の学生に限らず、学生全般、何かに打ち込むことを忘れさせられている社会人が触れるべき作品だと思われる。

小林白菜らが指摘するように、『ルックバック』を通じ、映画や音楽についても学びを深められるだろう。もちろん、筆者が読み取れていない箇所も多々あるはずだ。更に読み込みを進めたい。

筆者は本誌で『スター・レッド』や『日の出食堂の青春』という半世紀ほど前の名作マンガや、本稿執筆時点で約10年前となる『暗殺教室』、連載中とはいえ大学生よりも年長世代向けの『望郷太郎』について記してきた。筆者とは大きく世代が異なる学生に訴求するには、授業の対象となる大学生に人気のある、新しいマンガ作品をある程度は読み込む必要がある。今回の『ルックバック』はこの点で2025年段階の大学生の興味を引くものであるが、10年、20年後は「古く」なっているのかもしれない。ただし、『ルックバック』は『スター・レッド』、『日の出食堂の青春』等と同様に、世代を超えて残る名作であろう。今後も、時代ごとに、そのような人気作品を読み、分析していきたい。

謝辞

本稿は名古屋芸術大学の個別研究費および平成31(2019)年度および令和3(2021)年度および令和4(2022)年度の特設研究費(課題名「高大接続教育、大学教育、社会人教育における児童・ヤングアダルト文学作品およびマンガ作品の教材としての利用」)の助成を受けた。娯楽マンガは日本国内の作品に限定しても数多ある中、教材採用候補作品について名古屋芸術大学の教員および助手、事務職員、学生、オープンキャンパス等で話をした高校生の方々にご示唆を頂いた。編集と出版に尽力して下さった名古屋芸術大学キャリアセンターの教職員各位、校正にあたられた印刷・製本会社の方にもここで感謝申し上げます。

文献および註

- <1> 茶谷薫、「学習マンガ」ではなく「娯楽マンガ」を教材利用する意義—『スター・レッド』を例に、名古屋芸術大学教職センター紀要9号、2020、1-13頁
- <2> 茶谷薫、娯楽マンガ作品を教材に—『暗殺教室』に描かれた理想の教師・学校像—、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要10号、2021、63-75頁
- <3> 茶谷薫、娯楽マンガ作品を教材に(3)山田芳裕作『望郷太郎』、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要11号、2022、83-94頁
- <4> 茶谷薫、娯楽マンガ作品を教材に(4)はるき悦巳『日の出食堂の青春』、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要13号、2024、131-144頁

- <5> 秋田市文化創造館 WEB、<https://akitacc.jp/article/memory-003-tatsuki-fujimoto/> (2025/6/21 閲覧)
- <6> 『ファイアパンチ』5巻発売記念スペシャルコンテンツ 藤本タツキ 沙村広明 奇跡の対談、https://sp.shonenjump.com/p/sp/1706/fp_interview/index.html (2025/6/21 閲覧)
- <7> 『このマンガがすごいWEB』、2017/6/9、【インタビュー】藤本タツキ『ファイアパンチ』 ネットでも話題騒然になった第1話・衝撃的なネームを超特別公開!!、<https://konomanga.jp/interview/112091-2> (2025/6/21 閲覧)
- <8> 森田将輝、2021/8/2、藤本タツキ『ルックバック』表現を変更へ「通り魔」の描き方で議論が紛糾、KAI-YOU、<https://kai-you.net/article/81062> (2025/6/21 閲覧)
- <9> 小林白菜、2021/7/19、藤本タツキ『ルックバック』が大反響！ ジャンプ+にて公開中、143 ページの大長編読切マンガのタイトルに込められた意味とは？、ファミ通 com.、<https://www.famitsu.com/news/202107/19227600.html> (2025/6/21 閲覧)
- <10> namayagi、2024/8/3、ルックバックはoasisの夢を見るのか、note、<https://note.com/namayagi/n/nedc9c512515c> (2025/6/21 閲覧)
- <11> きたがわ翔、山田玲司、2023/01/28 収録、れいとしょう #12「このマンガがすごい！ 2022」ベスト 5、山田玲司のヤングサンデー、<https://www.youtube.com/watch?v=PEJA4w8MaOk&t=337s> (2025/6/21 閲覧)
- <12> amass、2016/01/11、デヴィッド・ボウイが死去、<https://amass.jp/67586/> (2025/6/21 閲覧)
- <13> togapon、2024/6/29、「ネタバレ注意！『ルックバック』映画レビューと原作漫画の魅力徹底解説、<https://togablog.org/lookback/> (2025/6/21 閲覧)
- <14> 『バクマン』は原作・大場つぐみ、作画・小畑健によるマンガ作品。『まんが道』は藤子不二雄^①（発表当時は藤子不二雄名義）によるマンガ作品。いずれも男子二人がコンビとなってマンガ家となるストーリーの長編作品である。
- <15> NHK、2024/10/31、不登校の小中学生 過去最多 34 万人余に 11 年連続で増加 文科省 <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20241031/k10014625011000.html> (2025/6/21 閲覧)